天津、盧溝橋、王府井など中国歴史から
２１世紀の現代中国の激しい変化を見る

本田　勁二郎（会員、熊本在住）

９月２０日から２５日までの中国旅行（旅システム）に参加しました。

６日の地震から二週間後ということで、中国などアジア諸国からの観光客が激減したと見えて、いつも混み合っている国際線の搭乗口が非常に空いていた。北京便は飛行機を中型に変更しても、機内はがらがらだった。地震の影響がモロに出ていた。旅行仲間は７人。

天津・労工記念館で

北京への飛行時間は４時間。北京空港の大きさにはただただ驚いた。夜に着いて、いろいろあって、その夜は王府井（北京の銀座通りといわれる）の近くの宿で宿泊した。

二日目、朝から専用車で天津へ。新幹線だと３０分だが、車だと２時間余り。山が見えず、中国の大きさがわかる。天津に入って、まず労工記念館。戦後、中国に滞在した日本人の多くが天津から日本に帰国したとか。逆に、戦争中強制労働で日本に連行された中国人の多くも天津に帰国したそうだ。また、日本に向かう途中で死亡した中国人や日本での過酷な労働などで命を失った中国人労働者の遺骨も、戦後、天津を経て中国に返還されたとのこと。その遺骨は現在も天津・労工記念館に保管・保存されている。遺骨の保存室は一般に公開されることはないが、日本から中国に返還された状態のまま保存されていた（日中友好協会の努力で見学できた）。また、別室に、５年前に北海道の日中友好協会の努力で贈られた観音像（1961 年製作）が日中友好の証として祭られていた。その後、天津古文化街、天津商店街などを観光。その夜は天津に宿泊した。

三日目。朝から日本租界の慰安婦遺跡、天津鼓楼、楊柳青石家大院などの観光地を見学。昔は天津鼓楼に上がれば遥か彼方まで見渡せたらしいが、今日では高層建築が取り巻いている。楊柳青石家大院はかっての大富豪石家の邸宅で昔の様子が偲ばれる。解放後は共産党幹部が住んでいたそうだが、反腐敗運動で、その幹部は息子の目の前で射殺されたとか。午後、観光地の見学後、専用車で北京へ戻った。

四日目。早朝、散歩を兼ねてみんなで天安門まで歩いて、天安門は先回りして見物。

午前は盧溝橋・抗日戦争記念館の見学。抗日戦争記念館は習近平になって拡張されたようだ。盧溝橋事件をはじめ、中国各地での抗日戦争の写真などが展示されている。一応、見学して盧溝橋へ。盧溝橋そのものは 800 年前の金の時代に造られた頑丈な石橋で、今日まで昔の姿を保っている。その橋を挟んで川の対岸から日本軍が要塞を砲撃したのが盧溝橋事件。日中戦争が勃発した事件だった。今日では盧溝橋事件だけでなく、いろいろな歴史的意味から北京近郊の観光地となっている。中国各地から盧溝橋を訪ね、盧溝橋事件を学ぶ人たちは多い。昼食後、午後は天安門広場。ガイドの時さんの説明を受けながらの見学。早朝に比べて観光客も多い。１００万人を収容できるという天安門広場。中国の首都の大きさが分かる。天安門を潜ってかなり歩いていけば紫禁城に着くのだそうだがかなりに距離があるとのこと。天安門広場以外にもいくつか見学して、夜は京劇鑑賞（１時間）。京劇の観光客も少なくはない。時さんの話では平日も演じられているそうだ。２５日の早朝に北京から千歳に戻った。

以上、今回の旅システムに便乗した中国旅行を簡単に書いた。天津、盧溝橋、王府井など中国歴史から２１世紀の現代中国の激しい変化を見る思いがした。なお、北京と天津で食べた食事は美味しかった。中国へはまた行きたい。